暇つぶしですハイ。あ、あと息抜きです。

海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暇つぶしですハイ。あ、あと息抜きです。

【Ｎコード】
Ｎ３３４３ＢＡ

【作者名】
海斗

【あらすじ】
タイトルの通りぶっちゃけ暇つぶしかつ、息抜き。書き溜めもない、プロットもない、その場の思いつきで書いて行くクソみたいなもんです。はい。誤字脱字の可能性と頻度もおそらく、サイコロを一回振って偶数の目がでるくらいの確立です・・・あっ間違った、確率です。

元の世界でも強者な少年が異世界へ…みたいな。

1話「介入」

もしもこの世に神という存在がいるとするならば、俺はおそらくソイツを憎むだろう。
この世の理不尽、思い通りにならない歯がゆさ、自らの無力さ、純粋な怒り、様々な事を思い、考えて行くのが人生だ。人間一度は神の存在に対して黒い感情を出しても不思議ではない。寧ろ出さない方がおかしいだろう。
しかし、ソレはいつまで続く？時間が経ち、幸福な時間が訪れ、忘れるまでか？ならば幸福な時間が訪れない者はどうする？幸福な時間の中でもソレを忘れられない者は？忘れられても直ぐにソレが出てくる者は？
答えは簡単だ。
続ければいい。怨み、憎み、怒り続ければいい。それ以外に選択肢などないのだから。

「………」

さてと、状況を整理しよう。

まず俺は、命令を受け、目標（ターゲット）を始末し、帰路についた。

そう、ここまでは良い。問題はここからだ。

普通に徒歩で帰っていたら、いきなりわけのわからないナニカが見え、気を失った。

「………」

そして、気づけば森の中………どこに『ドッキリ成功』と書いてあるカンペを持った奴がいるんだ？。

「俺が気を失うなんて一体いつぶりだ？」

まぁ、その事は一旦置いとくとしよう。問題は今俺自身がいる場所だ。

「………くそ、見えねぇ」

暗闇にはとても慣れていたはずだが、どういうわけかまったく周りが見えない。

「どうするか………、？」

そこで何かの気配を感じた。
これは………人か？

「………」

その気配を待つ事数分、ようやく2，3メートルくらいなら見えるようになってきた頃に出て来たのは赤な奴だった。

「・・・」

「………」

さてと、どうしたものだろうか？この〈鎧っぽい装備した、ところどころ肉が抉れ骨が見える、俺と同じくらいの大きさの赤い鬼っぽいもの〉と対話を試みてみるか？

「………」

「・・・」

「あ」

ジャキン

話しかけようとしたら、目の前の奴が腰の剣（多分カトラスかなんか）を抜いた。

「………」

「ギャシャー！！」

突然にそいつが地面を蹴ってこちらに向かってきた。というか・・・

（早（はえ）ぇっ！！！！）

思わずバックステップするのだが・・・

「なぁ！？」

今度は俺自身にビックリした。普通のバックステップでは間に合うかどうかギリギリ、間に合ったとしても追撃を食らってしまうと考え、短い距離のバックステップで躱し、カウンターを取ろうと思

っていたのだが。普通に余裕で躱せた、というか軽くバックステップするつもりが、３メートルは下がってしまっていた。

(力を入れ間違えた？俺が？いやそんなはずない、じゃあ)

そんな事を思考している途中にも目の前の奴が迫ってくる。

「ギャシャー！！」

(今は後回しだな………)

「フッ！」

即座に思考を中断し、戦闘に集中する。

(こんなレベルの奴とヤリ合うなんていつぶりだ？)

先ほどのスピード、滅多に居る奴じゃない。間違いなく強…

ドゴスッ！

「ギャー・・・」
「………は？」

とりあえず足蹴りで一発攻撃を噛ましたら、倒れた。なんか断末魔みたいな声出しながら………おい。

「一体何がどうなって………っ？」

そこで気づいた、自身の変化に。

「これは…………なんだ？」

身体に流れる『ナニカ』。それも『気』とはまったく別の物。

「それに…………筋力が」

そう、上がっている。先ほどの戦闘でもそうだが、体全体の筋力が段違いに上がっている。

「なんなんだ？」

闇の精霊神〈ニブルーム〉は気まぐれで、普段なら考えもしない「散歩」をしていた。

———今日は良い夜だ———

尤も、この散歩というのは普通の散歩ではなく、自分の存在を地上に少し出すというものだが。

———ん？———

そこで感じた一つの大きな違和感。これは・・・

———まさか、次元境断かっ！？———

次元境断、次元の裂け目が生じること。全界の構成上、あらゆる世界に不規則に発生する現象だが、滅多に現れるような現象ではない。精霊神であるニブルームでさえも感知するのはこれで2回目である。

―――近いな・・・行くか―――

次元境断は異世界のモノが入りこんでくる可能性がある。この世界を創世し支える一つの要素である精霊神は、この世界に害が及ぶ可能性がある物は排除しなければならない。ニブルームも役目柄行くことにした。

―――面白い事があればいいな―――

・・・・・・・精霊神としての役目：好奇心の比率は2：8だったそうな。

―――ん？人間か？―――

次元境断があった辺りに来てみれば、一人の人間がいた。

――ふむ、介入者か？――

そう思う、が――

――ああ、終わったなこの人間――

なんとその人間の前に運悪く「ロアコボルト」が現れた。コボルト種はゴブリンの上位種である。そしてロアコボルトはそのコボルト種の中級クラスにあたる。そこらの人間では敵うはずがない。

――まぁ、手間が省けたと思えば――

排除という仕事が省けるのである、まぁいいだろう。と思っていた。

「わけわからん」

あーこー考えてみたが、まったく分からない。いくつかの可能性は搾りこめたが、残ったものの確認ができない。というかまず周りが見えないとどうにもならない。

「………寝るか」

で、結局こういう事になるのである。まぁ、熟睡安眠はしない。こんな状況で安心して眠るなぞ、愚行である。

俺は木らしき物を探り、その根元に座りこんだ。

――・・・―――

ニブルームは、困惑していた。それもそのはずで、ただの人間・・・いや、介入者である可能性がある分「ただ」ではないか、とにかく大したチカラを持たないような人間がロアコボルトを一発で倒してしまった。しかも、その人間を軽く探ってみたところ何か感じた

事もないような『チカラ』を感じた。挙句の果てにその当の本人はその場で寝始める始末である。

―――異世界の者とはこれ程までに概念が通じないのか・・・というか寝るか普通！？―――

という具合に精霊神とは思えない程に困惑していたところ

―――ん？なんだお前達？―――

どういうわけか自らの支配下にある闇の精霊達が集まってくる。精霊神自体はその眷属の精霊の集まりであると言っても過言ではない。少なくとも地上に姿を現している事のほとんどがそうである。しかし、今集まってくる精霊は別に命令を下したわけでもなく、闇の精霊は風の精霊の様に元々好き好んで態々移動するような性格でもない。

―――一体どういう・・・なに？―――

ニブルームは今、目という部位があれば、恐らくこれでもかと言うくらいに目を見開いたにちがいない。

―――精霊達が引き寄せられている！？―――

そう、あの介入者と思しき人間へと精霊達が寄って行っているのだ。

これは驚くべき事だ。精霊達を認識できる者はこの世界で多くなく、さらに対話を行える者はもっと少ない。そして、精霊から好かれる者はその中のほんの一握りである。そして、『好かれる』にはまず、その精霊の系統に体も心も存在として近くなくてはならない。

例を用いて簡単に言うならば、水の精霊に好かれる者は水が、風の精霊に好かれる者は風が、体と心が一体に噛み合わなければならない。

そして、この世界には火・水・地・風の四元素精霊（エレメントスピリット）とその四元素精霊（エレメントスピリット）の上級クラスにあたる炎・氷・金・木の上位精霊（ハイスピリット）、そして光・闇の特位精霊（エクススピリット）がいる。四元素に存在が近い者は多い、上位精霊もその四元素に一定以上存在が近ければ条件は満たされる。しかし特位精霊の光と闇に存在が近い者はかなり珍しい。闇の精霊神であるニブルームもいままで数えるほどしか闇と近い存在を持った者はいなかった。

――ふむ・・・興味深いな――

1話「介入」（後書き）

人との会話がないから分からないかもしれませんが、主人公の「・・・」は「………」です。まぁ、人が出てきたら分かります・・・多分。

2話「ふぁーすとこんたくと」

ソコにあるのは、ヤミだけだった。そして、それが安息の時でもあった。

そのヤミに一筋のヒカリが走る。そう、絶望と恐怖のヒカリ……

………

絶望の中では死と血しかなかった、というかそれくらいしか思い出せない。印象がそれほど強かったというのもあるが、その時はそれが頭の容量という限界だった。

痛みに慣れた。血に慣れた。死に慣れた。悲鳴に慣れた。気づけば心も体も強くなっていた。

否、強くならなければならなかった。強くならなければ死ぬしかなかった。

今度は物の扱い方に慣れた。銃、刃物、爆弾、薬、その他にも命に害をなすもの全ての物の扱いを知り、慣れた。………これは閑話だが、自分には銃よりも刃物が合っていたようだ。死への高確率よりも、弾数というデメリットを自らのウデでカバーし、数の制限を無くした。

次に脳を鍛えた、知識、知能、思想、思考あらゆる物を詰め込んだ。

ある時、ふと思った。自分は何なのだろう、と。考えている内に自分は何故こんな事をしているのだろう？と思った。そして、思い

だした。今まで思いだす余裕がなく、脳の奥底に眠らせていた記憶が。

「………これはどういうわけだ？」

気分で目を覚ましてみれば周りに何かいる。こう、黒い光の粒のようなものがたくさん、こう………もわもわと………。

「何だお前ら？」

何故俺はソレらが生を持っていると思ったのか、知らず知らずのうちに話しかけていた。

「………」

ソレらはさらに俺に迫ってくる。３６０。全方向から闇が迫ってくる、これってかなり恐怖何じゃなかろうか？

しかし、なぜか俺はそう思えなかった。むしろ心地よかった、もっと近づきたい、触れてみたいと思った。

「………」

相も変わらずじわじわとこちらに寄ってくる闇。ソレに俺は手を伸ばした。

闇の光の粒の１つに指先があったった。俺はそれを撫でるように動かした。

その粒は俺の動かす手に伴い、指平で動いた。俺にはソレが子犬や子猫が自ら体を摺り寄せて来ている様な感覚を感じた。

「フッ」

おもわず笑ってしまった。すると・・・

「のわっ！？」

いきなりまわりの闇が纏わりついてきた。傍から見れば『闇に喰われそうになっている人』に見えるかもしれない。しかし俺からすれば………

「ちょっ、おい！こらっ！くすぐるな！っつか服の中に入るなっ！つか何さっきから笑っていやがる？俺は玩具じゃないぞ！！」

………である。

そんな未知のものとじゃれ合って（？）いたら・・・

「えーい！いい加減………ん？」

………

えー………なんかこうモクモクした黒いものが出てきました。

なんだこれ？

――――ふむ――――

ニブルームは、闇の精霊達のはしゃぎ様に少しばかり驚いていた。

――――これ程までに好かれているとは・・・――――

と、ニブルームの好奇心を掻き立てるには十分であった。
結果、このように近づいてみようという事になったのだが・・・

――これは・・・気づかれている？――

その少年はこちらの方を先ほどから、じっーと見ている。いかにも『何コレ？』と言いたそうな目で。

「なんだこれ？」

事実、今声にも出した。
これは確定か・・・

「なんだこれ？」

思わず心の声が漏れてしまった。
しかし、ほんとにこれはなんなんだ？ なんかコイツら（闇）と同じ感じがするが、少し違う………というか、少し捻じれているような感じがする。

————おい貴様————

「っ!?!?」

瞬時に立ち上がり、警戒する。

(俺が気づかなかった？声がする距離まで？)

―――こら、こっちだこっち―――

「っ！！！」

またた、また声がどこからともなくする。その上気配は相変わらず感じない。

「どこだっ！」

―――こっちだと言うとろうに―――

ガツン！

「あてっ！？」

いきなり頭に衝撃が。そちらを見ると、さっきのモクモクさん（勝手に命名した）だった。

―――名前は？―――

「………は？」

―――だから名前は？―――

「………は？」

ガツン！！

「イテーじゃねーかっ！この野郎！」

――うるさい、さっさと答えぬからだ――

「なにその単細胞的性格」

――名前は？――

どうやら振り出しに戻るようだ。

「………答える必要性が見当たらねぇな」

――ほう――

「取引だ、こちらの質問に答えれば、俺も答えよう」

――・・・ふんっ、人間風情が――

「あぁ、俺は人間だ、だから人間らしくやらせてもらう」

――・・・いいだろう、取引してやる――

「よし。まずここはどこだ？」

――ガンラシガ国北東部の森――

「………悪い国名をもう一っか¡

――次は我の番だ。貴様の全情報を提示しろ――――

「………せめて最後の【」】くらいは書かせてくれ。あと、それもう質問じゃなくて命令だっ！」

なんだ「全情報の提示」て、無茶ぶりにも程があるだろう。

――・・・――

「なんだよ？」

――いや、作者がいい加減話の進まない事にイライラしていてな・・・キンクリするそうだ――

「はぁ！？ちょっま

「なるほど…………」

とりあえずこいつから聞いた事を簡単にまとめるとしよう。

・ここは異世界
・俺は次元の裂け目からこの世界に来たらしい
・実質元の世界に帰る方法はない

・こいつは闇の精霊神
・こいつらは闇の精霊達

こんなもんか？まぁ、簡単に大雑把にするとこのくらいだ。……
…ん？なんだ？その目は？………なんだか知らないが、作者は「K
INCRI は正義！」だそうだ。………何の話だかまったく分から
ん。

「で？」

───む？───

「精霊神ともあろう御方が異世界の迷子の下等な人間に態々丁寧
に状況を説明しに来たわけじゃないだろう？」

妙に嫌みったらしい言い方である。

「アンタの口ぶりからするに俺は、この世界にとって危険分子み
たいなようだしな」

───ほう、では我がする事もお見通しかな？下等な人間クン─
──

「始末する気………だろう？」

───ふん───

「………」

───・・・───

その後数分間お互いの間に沈黙が続いた。

――――・・・やれやれ・・・そうだ、排除する・・・つもりだった――――

「だった？」

――――まったくどういうわけか知らないが、お前を殺すのは性に合わん。それどころか、いろいろ　お前と話してみたくなった――――

「はっ？わけがわからん」

――――お前は闇に好かれやすい体質だと言う事だ。それも異常にな――――

「………ハーン」

――――で、そう言う事だから俺と契約しろ――――

「うん、何が『そう言う事』で、何故いきなり契約に繋がるのかまったく分からない」

――――俺達精霊神は世界創世だとか、したはしたんだが・・・まぁいろいろ複雑でな、地上の奴と定期的に契約しないといけないんだ――――

「なにゆえ？」

―――まぁ、信仰だとか、感謝の念だとか、な・・・そこら辺のごちゃごちゃだ―――

「無茶苦茶適当だな」

―――俺は他の精霊（ヤツラ）とは違って滅多に契約をしないんでね―――

「あそ………で？契約すると俺にはどんなメリットがあるんだ？」

―――まぁ、闇系統を中心とする魔法にどーたらこーたら―――

「わかった、俺が聞いたのが間違いだった」

―――失礼な奴だな、これでも精霊神、神だぞ？神―――

「だったら、もっと神の威厳っぽいものを持てよ！」

―――そんなものは当の昔に喰った―――

「喰ったんかい！つーか、一番初めの口調とちがくないか、お前!?」

一人称とか、もはや完全にちがう。

―――流せそこは―――

「流すな」

―――こっちの方が気楽なんだよ・・・というか会話自体久しぶ

りだしな――

「は？ 精霊神同士で話とかしないのか？」

――オトモダチじゃないんだよ、近づきすぎれば世界のバランスが危うくもなる。それに俺は闇だ。闇は本来こういうものなんだよ――

「ふーん、いろいろ複雑なんだな」

――そうだ。というかさっさと契約しろ――

「えー」

――もうめんどくさいから無理やりな？――

「いや待て、なんだそのショーケーキの切り分けみたいなノリは！？ そんなノリで強制的にするな！」

とかなんとかやっているうちに黒いモクモクが広がっている。霧なのかというくらいに。

「おい、話をっ」

――これから儀式的なものを行うから、名前を言え――

「そういえば、言ってなかったな………ってちがう！ そうじゃｎ」

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3343ba/

暇つぶしですハイ。あ、あと息抜きです。

2012年1月8日18時47分発行

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。